世界を変えよう基金　「チェンマイの無償教育の現場で」

筑波大学 生命環境学群 生物学類 2 年　川原瞳

タイ北部チェンマイの山奥にある学校。ここでは、金銭的な問題で正式な学校に通えない生徒が無償で教育を受けることが出来る。本来この学校は国王の母親による支援を受けていたのだが、母親の崩御に際して支援が得られなくなったのを、その母親の名前を借りている大学が、支援を申し出たことにより、現在も大学に通う学生の授業料により学校が成り立っている。タイは、途上国の中ではより発展した国であるが、現在はその発展度合いに低迷が見られている。教育を受けることで、より良い判断能力が人々の中で培われるとしたら、教育の普及に遅れがみられているタイ北部での学校教育はタイの発展に大きく寄与していくと考えられる。

初の途上国、初の一人での海外滞在であったが、やはり日本との違いには驚かされた。ホームステイ先のシャワーは水しか出なかったり、トイレには詰まるからという理由で紙が流せなかったりした。教室には机や椅子はなく、床に座って一つのホワイトボードを使って授業を行っていた。実際に生徒と関わってみて、上級生(14-15 歳)の生徒の中には英語による会話がある程度可能である人もいたが、基本的には現地の先生による通訳が必要であることが多かった。基本的な文法があまり定着しておらず、計画的な学習を進めるためのカリキュラムが必要であると感じた。また、辞書をひく習慣がなく、生徒の学びが受け身で、自分で考えるということがあまり出来ていないように感じた。また、話を聞くということが難しいようで、集中力の欠如もよく見られ、生徒の興味をひくようなゲームを取り入れた授業が必要とされた。

私は、小学生の頃から途上国支援に興味を持っており、途上国に住んで現地の人々のために何かしたいとずっと考えてきたが、今回初めて途上国で生活し、ボランティア活動を行ってみて、色々と考えさせられることがあった。というのも、そもそも私自身の経験が浅く、途上国支援に対しての理解があまり出来ていないと感じたからである。現地の人々はボランティアである私に対して何を望んでいるのか、現地の先生は生徒たちにどのような知識や能力を身に着けてほしいと考えているのか。そういった支援の目的をはっきりとさせた上でボランティアを行うことが、より効果的な支援につながると感じた。そして、途上国支援によって、最終的には現地の人々が自分たちだけの力で課題を解決出来るようにならなければならないというのが途上国支援の鉄則とも言える。主役は現地の人々であって、支援する側ではないということを忘れてはならないと私は考える。また、より効果的な支援を実現するためには、長期的で計画的であることが望ましく、私自身もその道のエキスパートである必要があると感じた。

今回のボランティアは私にとっては途上国支援の 1 つ目のステップで、これから自分がどのように途上国支援に対して関わっていくかについて深く考えることが出来たという点で非常に有意義であった。また、現地での生活や現地の人々との交流から、途上国について

の理解も深まったと考える。日本で生まれ育った私にとって、途上国での生活は正直に言って快適ではなかった。日本が恵まれているということや、日本の当たり前は当たり前でないということを身にしみて感じた。その便利さや快適さというのは、これまでの先人たちの努力の積み重ねのおかげであり、私はその努力を引き継いでいきたいと考えている。それと同時に、他の国で暮らす人々にも日本の良さを知ってもらい、そのいいところを模倣しつつ彼らの暮らしがより良くなるような手助けをしていきたいと考える。